

▲1 世界三大宗教の分布 キリスト教・イスラーム教・仏教の三宗教は、世界中で多くの人々に信仰され、世界の歴史に大きな影響をあたえてきた。

2 シャカ (前563頃～前483頃)

シャカはヒマラヤの山麓に住むシャーカーヤ族の王家に生まれた。29歳のときに出家し、35歳のときに菩提樹の下でさとりを開き、以後ブツダ(「目覚めた者」という意味)と呼ばれた。シャカは人生の本質が生・老・病・死の苦しみであると説き、それを取り除くための修行の道を示した。弟子たちと仏教教団をつくり、各地に布教した。

パキスタン ラホール博物館蔵

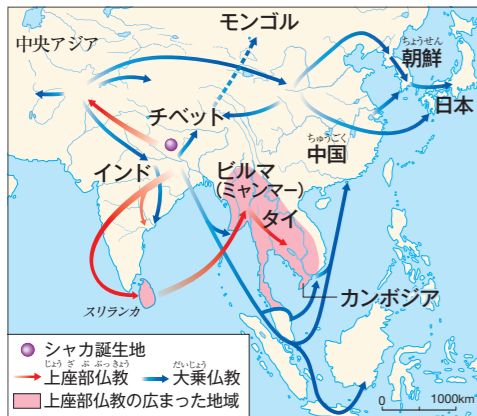


このようにやせ細っているのはなぜだろうか？

人物

5 宗教のおこり

●三大宗教は、それまでの宗教と比べて、それぞれどのような点が新しいのだろうか。



▲3 仏教の広がり 万人の救済を重視する教え(大乘仏教)は、主に中央アジアから中国・朝鮮を経て日本に伝わった。一方、個人の修行を重視する教え(上座部仏教)は、スリランカを経て東南アジア方面に広まった。

大乗仏教が日本に伝わったのはなぜだろうか？

用語解説

バラモン教 バラモン(→p.19)がとり行う儀式を中心とした古代インドの宗教。のちのヒンドゥー教の基になった。

宗教と世界

人々は先史時代から、自分たちの能力をこえた自然現象をおそれ敬ってきた。宇宙や人類がどのようにして誕生したのか、災害や病気や死といった不幸がなぜ起こるのか、人間は死んだらどこへ行くのか、といった根本的な疑問に答えるために宗教は生まれた。

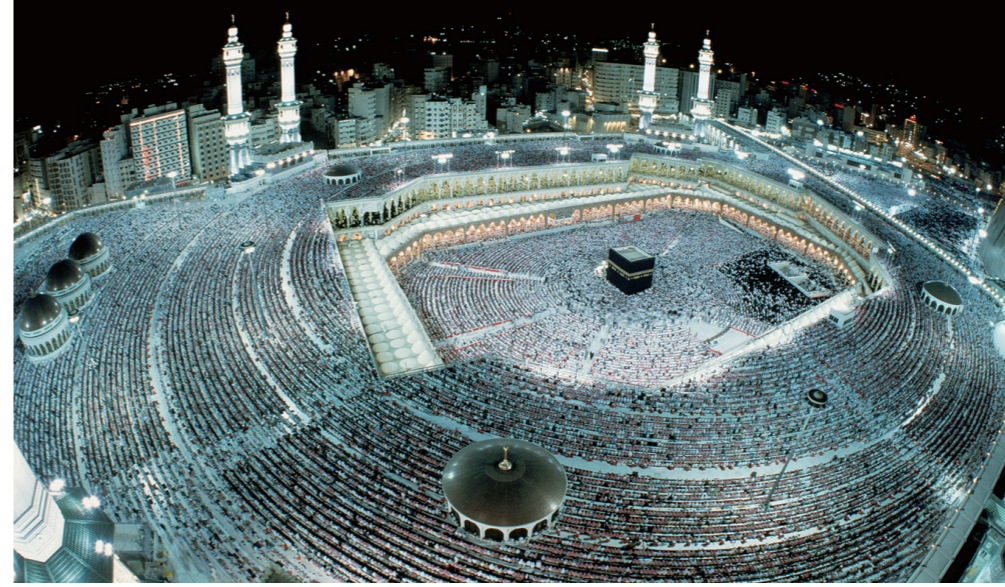
やがて国家や帝国が出現し、社会が複雑になっていくにつれ、それまでの宗教では救われない人々も多く現れた。戦乱やききん、身分制度や権力に苦しめられていた立場の人たちの間に、新しい宗教が広がった。

仏教のおこりと広がり

紀元前6世紀ごろのインドに生まれたシャカ(釈迦、ガウタマ=シッダールタ)は、人々の迷いや苦しみは修行によって心の内面から解消できると教え、バラモン教が重んじた儀式や身分の考え方を否定した。シャカから始まった仏教では、のちに自分の修行よりも人々の救済が重要であると説かれるようになり、インドから世界へ広がった。南方ではスリランカを経てビルマ(ミャンマー)・タイ・カンボジアなど東南アジアに、また北方では中央アジアから中国・朝鮮を経て日本に伝わった。仏教はその教えが伝わっていく中で各地にさまざまな新しい教えを生み出し、展開していった。一方で、インドでは仏教の勢いがおとろえ、かわってバラモン教の流れをくむヒンドゥー教が根付くようになった。それとともに、インド独自の厳しい身分制度であるカースト制度も確立した。

キリスト教のおこりと広がり

西アジアのパレスチナ地方では、ヤハウェを全能で唯一の神とするユダヤ教が信仰され、その



▲4 カーバ聖殿に巡礼するイスラーム教徒 カーバ聖殿はメッカにあるイスラーム教信仰の中心。イスラーム教徒は1日に5回、聖地メッカの方角に向かって礼拝を行う。



くわしく見てみよう「コーラン」を唱える様子

教えは『旧約聖書』にまとめられた。やがてこの地はローマ帝国によって支配され、パレスチナの民衆はローマ帝国の支配に苦しんだ。紀元前後にこの地に生まれたイエスは、神の愛が貧富の区別なく全ての人々を救うことを説き、また人々がたがいに愛し合うことの大切さを教えた。

民衆はイエスを救世主(キリスト)だと信じたが、イエスの活動を好ましく思わなかったローマ帝国により、反逆者として十字架にかけられ処刑された。しかし、イエスの教えは弟子たちによってローマ帝国各地に広められ、ここにキリスト教が誕生した。その教えは『新約聖書』に記されている。やがてキリスト教はローマ帝国に公認され、ヨーロッパで広く信仰された。のちにヨーロッパの人々が世界に植民地を築くようになると、アメリカやアフリカ・アジアにも広がり、16世紀には日本にも伝わった。

イスラーム教のおこりと広がり

アラビア半島西部に生まれたムハンマドは7世紀の初め、唯一の神アッラーを信じるイスラーム教を始めた。この教えはユダヤ教とキリスト教から影響を受けたもので、アッラーに絶対服従すること、神の姿を偶像に表して拜んではならないことなどが教えの基本である。イスラーム教の教典『コーラン』は、ムハンマドに神からあたえられた言葉を記録したもので、信仰だけでなく、政治や経済・文化など人間生活のあらゆる面の決まりが定められたものである。

イスラーム教はアラビア半島を中心に、西アジアや北アフリカ、さらにはインドや東南アジアまで広がった。

▼5 イエルサレム イエルサレムはパレスチナ地方の中心都市で、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の聖地である。写真はイスラーム教の聖地である「岩のドーム」(上)と、ユダヤ教の聖地である「嘆きの壁」(下)。

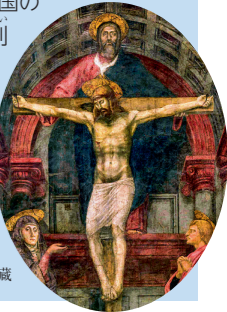


人物

6 イエス (前7頃/前4頃～後30頃)

イエスは、律法(教え)を厳格に守ることを命じるユダヤ教の指導者たちに反対し、貧民や病人などの社会的に弱い立場の人々を救うことを目指して隣人愛を説いた。ユダヤ教の指導者は、かれをローマ帝国の当局に訴え、イエスは処刑された。のちに弟子たちの間では、イエスが復活し、その死が人間の罪をあがなってくれたという信仰が生まれ、ここにキリスト教が生まれた。

イタリア サンタ=マリア=ノヴェツァ教会蔵



用語解説

一神教 唯一の神を信じる宗教。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教などが代表的である。一方、古代ギリシア・ローマの宗教やインドのバラモン教は、多数の神々を信じる多神教である。

ステップアップ

それぞれの宗教が現在のようなかたちで世界各地に広がったのはなぜだろうか。

1も参考にしながら考えてみよう。

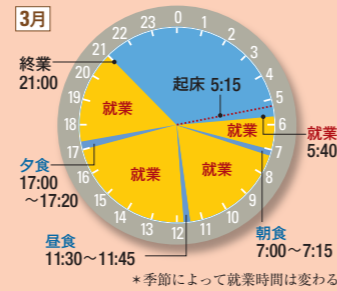




▲1 工女の働く様子 長野県内の製糸工場の様子。このように、製糸工場は養蚕業の盛んな中部地方や関東地方に多くつくられた。

長野県 須坂市立博物館蔵

紡績工場(→p. 202)と比べてどのような特徴があるだろうか？



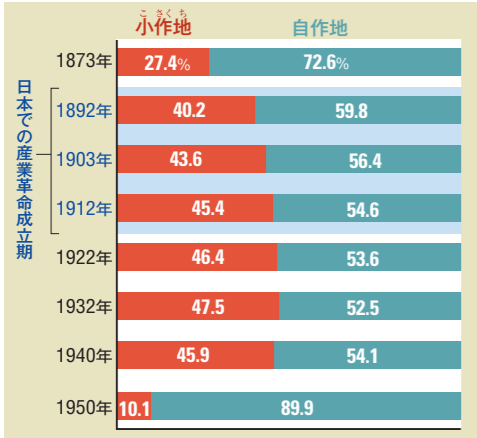
▲2 製糸工場での労働時間 長野県諏訪郡の製糸工場では、1日14時間30分の労働時間で、休みは1日と15日の月2回であった。

〔長野県立歴史館展示案内〕による

▲3 製糸工女の実態 (一部要約) 製糸業の労働者を見ると、さらに機織り労働者より悲惨なものには驚いた。労働時間は、忙しい時には朝寝床を出てすぐに働き、夜も十二時になることも少なくない。食べ物も粗く、ひいた大麦六割に米四割を混ぜたものにたえない。とくに驚くべきことには、ある地方のように、作業がひまな時にはまた期限を定めて別の所へ奉公に出し、その収入は雇い主が自分のふところに入れておいて、こうして働いても賃金は多くとも二十円をこえない。……もし、さまざまな労働者を比較し、労働者の身の上が悲惨で気の毒な者を挙げるとすると、製糸工女がその筆頭に挙げられよう。

2 都市と農村の変化

●工業の発展によって都市や農村はどのような問題に直面したのだろうか。



▲4 小作地率の変化 「近代日本経済史要覧」による

① 地主の中には、自らは農業を行わず、小作料からの収入で生活する者も現れた。こうした地主を寄生地主という。

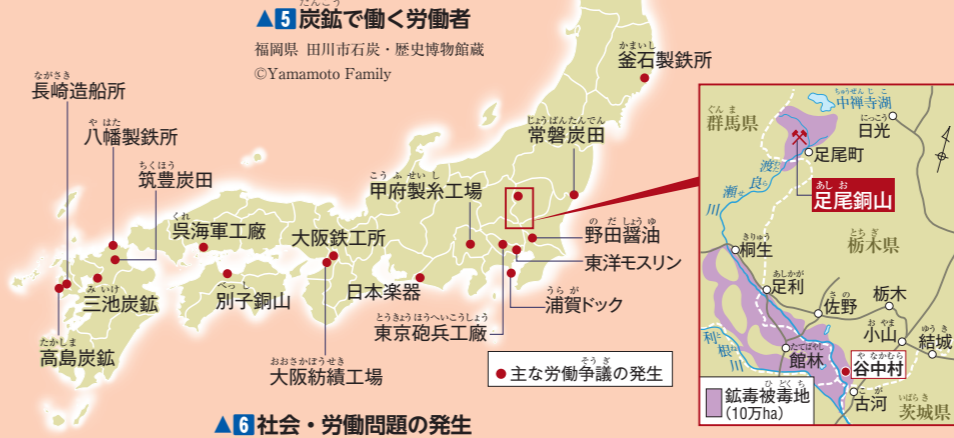
▲5 農村の変化 貿易の拡大や工業の発展は、農村も変化させていった。1880年代前半、大蔵卿の松方正義は増税や財政支出を減らす政策を行った。この政策によって、米や繭などの農産物の価格が下落し、農民の収入は大幅に減少した。しかも地租の額は変わらなかったため、相対的に税の負担が増えて土地を手放し、小作人に転落する農民が増加していった。地主に支払う小作料の負担は重かったため、小作人の娘の中には家計を補うため、製糸工場などに出かせぎに行く者も増えた。一方、土地を買い集めた地主は、得られた小作料の収入をもとに、企業を設立したり、株式に投資したりして、商業・工業のない手となっていった。

紡績業は原料にインドや中国などから輸入した綿花を使ったため、国内の綿花栽培がおとろえ、同じく輸入品におされて麻や菜種の栽培もおとろえた。かわって、製糸業の発展にともない、原料となる繭を生産するための桑栽培や養蚕が盛んとなった。また、都市の人口が増加することによって米の需要が増え、米の収穫を増やす品種改良や農業技術・肥料の改善などの努力が行われていった。

▲6 労働者と社会問題 工業の急速な発展は、さまざまな社会問題をもたらした。紡績業や製糸業で働く労働者の大半は、農村から出かせぎにやってきた若い女性(工女)で、低賃金で長時間(紡績業では



くわしく見てみよう 山本作兵衛の炭坑記録画



▲6 社会・労働問題の発生

12時間、製糸業では14~18時間)の厳しい労働を強いられた。寄宿舎の衛生状態も悪く、肺結核などの病気で命を落とす者も多かった。鉱山業や運輸業の労働者は男性中心であったが、特に炭鉱で働く労働者の悲惨な状況は大きな社会問題となった。

この問題に対して、日清戦争後には労働組合が結成されるようになり、労働条件の改善を求める労働争議も増加した。こうした動きに対して政府は、1900(明治33)年に治安警察法を定め、集会や結社を制限して労働運動を取りしまった。一方、1911(明治44)年には工場法が制定され、労働者の保護が図られたが、実際にはさまざまな例外規定があり、労働条件の改善は進まなかった。社会主義への関心も高まり、社会主義政党も結成されたが、政府はこれを厳しく弾圧した。1910(明治43)年には明治天皇の暗殺を計画したとして、幸徳秋水ら社会主義者を死刑としたが、その多くは計画に直接関わっていなかった(大逆事件)。

産業の発達にともなって、環境・公害問題も発生した。栃木県の足尾銅山では、鉱毒が渡良瀬川に流出して、流域の農業や漁業に大きな被害を出した。これに対し、栃木県選出の衆議院議員田中正造は、政府に足尾銅山の操業停止をせよと求めた。政府も調査に乗り出し、足尾銅山に鉱毒防止策を行わせたが、外貨が得られる銅を輸出するために操業を停止せなかった。そのため、煙害などの被害は続いた。

▲7 田中正造(1841~1913) 足尾銅山鉱毒事件に対し田中正造は議員を辞職して、天皇に直訴するなど反対運動を続けた。政府は被害と洪水緩和のために渡良瀬川と利根川の合流点近くの谷中村を遊水池として廃村にした。しかし田中はこれを不服とする住民とともに谷中村に残り、生涯をかけて反対運動に取り組んだ。足尾銅山鉱毒事件は日本の公害問題の原点といわれる。まさに日本の産業革命のかけの部分であった。

▲8 工場法 (一部要約) 工場法の条文で禁止されていないものは何だろうか？

第一条 本法は、この条項の一に該当する工場に適用する

第二条 工場主は、十五歳以上の労働者を使用している工場主は、十二歳未満の者を工場に働かせてはならない

第三条 工場主は、十五歳未満の者や女子を一日十二時間を超過して働かせてはならない

ただし、管轄する大臣は業務の種類によって、本法律施行後十五年間を限度として前項に定めた就業時間を二時間まで延長することができる

(官報)

ステップアップ 足尾銅山鉱毒事件について、政府側・資本家側・住民側の三者の立場から、それぞれの見解をまとめてみよう。